

8月10日 メッセージ

聖書：コリントの信徒への手紙二 5：14 - 6：2

「和解」

8月15日は「終戦の日」として知られています。これは、1945年8月15日正午、昭和天皇がラジオを通じ、国民に対して戦争に負けたことを告げたことに由来します。有名な「堪へ難キヲ堪へ忍ヒ難キヲ忍ヒ以テ万世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス」で知られます。この玉音放送の中では、連合国側が日本に降伏を勧告し、戦後処理の方針を示した「ポツダム宣言」を受諾することも触れられました。

一方、アメリカなどでは9月2日を「対日戦勝記念日」(Victory over Japan Day=V-J Day)としています。これは、1945年9月2日、日本が降伏文書に署名したことに由来します。どちらか一方が正しくて、どちらか一方が正しくないと言いたいものではありません。当時の国家元首が国民に告げ知らせた日を基準だと考えるのか、それとも、国家同士の関係は文書に署名して初めて実効的なものとなると考えるかの違いです。

同じ出来事が見る角度によって違う形で受け取られることがあります。人間同士の関係においても同じことが言えるでしょう。例えば、拳を振り上げた側は、自分が拳を降ろした時点で物事は終わったと考えやすいものです。一方、痛めつけられた側は、仮に相手が拳を収めたとしても、いつ再開するかと怯えながら時を過ごすことになります。

強者はどうしても自分を中心にしてしまうのでしょう。「喉元過ぎれば熱さを忘れる」とばかりに、「自分が反省すればそれで物事は終わりだ」と考えてしまいます。そして、神との関係でも同じように振る舞ってしまうのです。

預言者ホセアは、「反省しているふりをしている」イスラエルに対して、「お前たちの愛は朝の霧／すぐに消えうせる露のようだ。」(ホセア書6:4)と神の思いを伝えます。「形だけ整っていればそれで神は喜ぶはずだ」とうそぶく彼らに、「わたしが喜ぶのは／愛であっていけにえではなく／神を知ることであって／焼き尽くす献げ物ではない」(ホセア書6:6)と手厳しい。全ては実効性を伴ったものでなければならないのです。

だから、イエスもこの言葉を引用して、『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、行って学びなさい。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」(マタイによる福音書9:13)と告げられます。自分の正しさだけを振り上げて、神の思いを聞こうとしないことは、神の前に正しいと言えるだろうかと問われます。そして、自分の都合ばかり押しつけることは決して愛の関係ではないと明らかにされています。

それでも、神は、イエスは人間を見捨てることなく呼びかけてくださっていることに感謝しなければなりません(「主に感謝せよ。主は慈しみ深く／人の子らに驚くべき御業を成し遂げられる。」詩編107:8)。諦めずに神との関係を、人間同士の関係を正しく、豊かなものにしたいと願っておられるのです。

「神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました。」(コリントの信徒への手紙二5:18)

「和解」は一回限りの出来事ではありません。勝手に壊してしまった関係を、相手の赦しによって再構築してもらったのだから、その関係を維持するために努力し続けることが和解です。だから、「神に赦されたのだから、何をしてもかまわない」訳ではないのです。

むしろ、絶えず神に聞き続けることが求められます。そればかりか、自分のことばかりだけでなく、壊れてしまっている関係を修復するために働くことが求められています。だから、神は「破壊の言葉」ではなく、「和解の言葉をわたしたちにゆだねられたのです」(コリントの信徒への手紙二5:19)。

8月15日であれ、9月2日であれ、どちらを起点としてもかまいません。すでに始められている「真の平和」へのプロセスをどう受け止め、未来へと受け継いでいくことができるか。そのために語るべき実効性を伴う「和解の言葉」とは何か、考え続けたいと思うのです。

